

車輪を担う

山本 博之

『カラム』誌上で読者からの質問に答えるコラム「千一問」には、男女交際・家族関係や礼拝・喜捨などのイスラム教徒(ムスリム)としての生き方に関するものや、当時脱植民地化・建国の過程を歩んでいたマラヤ／シンガポールおよびそれを取り巻く世界の情勢に関するものが多いが、『カラム』の創刊号に掲載された最初の「千一問」には、やや毛色が変わった次の質問が掲載されている(Q1)。

Q1

自動車のような車は各車輪の大きさが同じですが、なぜ四輪牛車の車輪は前方二輪が小さく、後方二輪が大きいのですか[*Qalam* 1950.7-8: 24]。

「千一問」には読者から多くの質問が寄せられていたようだが、これは創刊号なので「千一問」の回答者であるチュムティ・アルファルークこと『カラム』創刊者のサイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル=エドルス(以下、エドルス)が自作した質問と回答だと考えてよいだろう。同じ号に掲載された回答は次の通りである。

A1

狭い場所では自動車だとバックしてから前進し、再びバックしてやっと方向転換できるが、四輪牛車はそのような場所でも方向転換できるようにわざと前方二輪が小さく、後方二輪が大きく作られている。

これだけ読んでも連載第1回を飾る質問と答えがなぜ牛車の車輪なのかはわかりにくいですが、同じ号の巻頭に掲載された『カラム』創刊の言葉には次のようにある。

私たちが『カラム』を刊行するのは、他人と競ったり争ったりするためではなく、マレー語論壇の進歩のための車輪を一つ付け加えたいためです。(中略) 今日、私たちが暮らすマレー世界は、社会環境、思想環境、政

治環境のいずれにおいても大きな変化に直面しています。それらの変化が私たちにとって有意義であって生活を向上させるものとなるためにも、私たちは適切な指導者や指針を必要としています[*Qalam* 1950.7-8: 3-4]。

『カラム』をマレー語論壇という車の車輪に喩えた創刊の言葉を先の「千一問」とあわせて読むならば、『カラム』はまだ規模が小さいけれど、大手のマレー語新聞と違って小回りがきく媒体としてマレー語論壇を豊かにすることに貢献したいし、しかも後輪ではなく前輪として車全体の道行きの方向付けをしていくのだという意気込みが感じられる。

カリマンタン島のバンジャルマシンでアラブ系の両親のもとに生まれたエドルスは1930年に19歳でシンガポールに渡った。アラブ系のアルサゴフ家が所有するアングロ・アジアティック出版社(後にワルタ・マラヤ出版社に改称)で写植工見習いになり、後に『ワルタ・マラヤ』紙の編集部に入った。日本軍政期後の1947年7月にはいったんウトゥサン・ムラユ出版社で職を得て『ウトゥサン・ムラユ』紙の編集に携わったが、同社を半年ほどで辞めている。『ウトゥサン・ムラユ』紙はアラブ人資本の新聞に対抗して復刊されたマレー人資本の新聞であり、アラブ系であるエドルスの居場所はなくなっていった。このためエドルスはカラム出版社を立ち上げ、1950年7・8月に月刊誌『カラム』を創刊した。『ワルタ・マラヤ』や『ウトゥサン・ムラユ』などの大手マレー語新聞の実情をよく知ったエドルスが、それに負けない媒体を作ろうという覚悟で『カラム』を創刊したことが創刊の言葉と「千一問」の初回からうかがえる。

創刊の言葉には他人と争ったり競ったりするためではないとあるが、現実には、雑誌および出版社の存続をかけて他の媒体と争ったり競ったりすることの連続だった。

『カラム』の誌面づくりは、ジャウィ(アラビア文字)

の使用と写真の多用に特徴がある。マレー語雑誌の多くは、読者層を広げるためなどの理由で、日本軍政期を境に使用文字をジャウイからローマ字に切り替えていった。これに対して『カラム』は、1960年代末までジャウイの使用を貫いた数少ないマレー語雑誌だった。この頃には雑誌の誌面に写真を掲載することが容易になり、1950年代には写真の多用を宣伝文句にするマレー語雑誌が複数登場していた。雑誌の存続の最大の要因は記事の内容にあるが、ジャウイの使用という「古さ」と写真の多用という「新しさ」の同居も、マレー語雑誌の中で『カラム』をユニークなものにしていた。

『カラム』の競合相手はマレー語雑誌だけではなく、『カラム』の刊行と同じ時期に重要性を帯びるようになった媒体に映画がある。1902年にシンガポールに紹介された映画は、1920年代には地元製作の映画が多数作られるようになった。マレー映画製作会社(1947年に映画製作を開始)をはじめとする複数の映画製作会社により多くの映画が作られた1950年代はマレー映画の黄金期と呼ばれている。

『カラム』は映画を意識していたようで、「千一間」には映画に関するものがいくつか見られる。いくつか紹介しよう。

映画館を建てることは適切か、そこで収入を得ることは適切かとの質問(Q137)に対し、映画館を建てることは禁じられていないが、上映が適切かどうかは上映される映画の内容により、メッカ巡礼を伝道する映画は推奨されるがモラルを損なう猥褻な映画は上映が認められないとした[*Qalam* 1951.9:39]。関連して、芝居を上演して料金を徴収してもよいかとの質問もあり(Q186)、映画と同様に、芝居は禁止されていないが、芝居の中で男女が交わったり異性装をしたりすることは禁じられており、そのような芝居を上映して料金を徴収してはならないとした[*Qalam* 1952.2:30-31]。

マレー映画は当初、インド、中国、フィリピン、インドネシアから招聘した監督に製作を任せており、キャストやスタッフにも外国出身者が多かった。地元出身者を多く使った映画が作られるようになるのは1950年代後半からで、1948年の『チンタ』で初出演したP.ラムリーが1955年に『ベチャ引き』で初監督を務めてからのことである。

「千一間」には、マレー映画の一部には火を崇めたり偶像崇拜したりする行為が登場するが、これは適切

なのかとの質問(Q82~84)があり、役者は意図的に偶像や火への崇拝を演じていないとしても信心深い人たちからみれば多神崇拝にあたるので避けるべきであるとしている[*Qalam* 1951.4:27-29]。1947年から1950年までに製作されたマレー映画17本の監督別製作本数の内訳は、インド人が3人14本、インドネシア人が2人2本、アメリカ人が1人1本である。火や偶像を崇拝しているのが具体的にどの作品を指しているのかは調べがつかないが、外国人監督による作品の内容への違和感があったことがうかがえる。

関連して、マラヤやインドネシアの映画スターは礼拝や断食などの宗教の教えを守っているかとの質問(Q206)に対し、大半の映画スターは宗教の教えを守っておらず、それどころか役者の仕事は男女の交際に関するイスラム法に反しているとする[*Qalam* 1952.4:16]。前半部分はどのような情報かもとになっているのかはよくわからないが、後半部分は映画の内容から判断したものと思われ、けしからんと思いつつも映画館に通っていたエドルスの様子が思い浮かぶ。

また、庶民の男性がトゥンクやシャリファの敬称・尊称を持つ身分の高い女性を妻とすることの妥当性を問う質問(Q97)に対して、一般人と身分の高い人の結婚は対等なものではないという議論があることや、自分たちの血統を守ろうとして娘を一般男性と結婚させることに反対する人々がいることに触れた上で、実例やコーランの内容をもとに、強制ではなく合意に基づくものであれば結婚を禁止したり違法としたりする根拠はなく、そのような結婚を認めない考え方はまるでイスラム教の中に高低があるようだと批判した[*Qalam* 1951.5:36-37]。

この質問と回答は、エドルスが『ワルタ・マラヤ』紙の所有者であるアルサゴフ家の娘と結婚した後同紙の編集者に昇格したことを想起させるとともに、P.ラムリーの監督第一作である『ベチャ引き』(1955年)も思い出させる。ベチャ(人力車)引きで生計を立てている貧しい男が身分の高い家の娘を見初め、貧富や身分の違いを超えた恋愛が成就するかというドラマである。この映画が製作されたのは「千一間」のこの質問の4年後なので両者の間に直接の関係はないだろうが、当時のマラヤ/シンガポールのムスリム社会では貧しい男と良家の娘の結婚(とりわけマレー人男性とアラブ系女性の結婚)が重要な課題の一つであったことがうかがえる。

ベチャ引きとはもっぱら自分の肉体を動力源として人や物を運ぶ仕事であり、わずかな元手でも始められるが、肉体の酷使の度合いに比べれば収入は多くない。今日のマレーシア／シンガポールのムスリムの価値観に照らせば低い評価を受けそうだが、「千一間」ではベチャ引きに低い評価を与えていない。ムスリムがヨーロッパ人の靴を磨いて生計を立てることの妥当性を問う質問(Q164)に対して「体力と努力による仕事で生計を立てるのはむしろ尊敬すべきである」[*Qalam* 1951.12: 41]と答えているのも同趣旨である。エドルスは、車輪を担うこと、すなわち自分の力で小まわりよくものごとを進めていくことに積極的な価値を見出していた。